

終業のチャイムが鳴ってから大分経って、日が傾きかける頃、
誰もいなくなった教室で、僕は一人、夕日を眺めていた。
僕は相坂小夜、この教室で60年自縛霊をやっている。
ただ、僕、幽霊の才能がないみたいで、ほとんど誰にも気づかれてない・・・
でも、何人かの人には僕が見えるみたいで、そういう人と“ともだち”になれて、今はすごい幸せ。
幸せ、なんだけど・・・

小夜朝SS 「いつもそばにいるよ」

「んあ～・・・つかれた～！」

突然教室の扉が開くと同時に、大きなため息まじりの声を出して教室に入ってきたのは、朝倉和美さん。
僕のことが見える数少ない人の一人。
凄い美人で、頭もよくて・・・僕の、憧れの女の人・・・
・・・な、なな何言ってるんだろう僕、いけないいけない！
でも、なんだか今日の朝倉さん、様子が変わるなあ・・・
いつもにこにこしてるのに、心なしかちょっと落ち込んでるみたいだな・・・

「ど、どうしたんですか？ 朝倉さん」

「あ～、小夜君・・・いやね、ちょ～っと部長にしぼられてさあ・・・これからここで記事作らなきゃいけないわけ」

「そうなんですか・・・大変ですね」

「ん～、でも好きでやってることだからね、頑張るっきゃないか」

そういいながら記事を広げる朝倉さん。
でも、記事を書くための鉛筆は止まったまま。
少し前、「最近スランプなんだよね～」って、ちょっと苦笑いしながら言った。
朝倉さんの机の近くまで飛んで行って、横に並べてある資料を読んでみたけど・・・60年前に死んだ僕にはよくわからないことばかりだった。
何か手伝おうにも、幽霊の僕じゃすり抜けるばかりで、資料を取って渡してあげたり、差し入れを持ってきてあげることも出来ない。
こういうとき、すごく、すごく自分が歯がゆく思える。
朝倉さんは、誰も気づいてくれなかった僕に気づいてくれて、こうして“ともだち”になってくれたのに、僕は朝倉さんのために何もできない。
僕はなんて非力なんだろう、僕はなんて無能なんだろう、僕は、なんて

「…………ごめんなさい」

「え？」

気づいたら、いつの間にか僕は朝倉さんに謝っていた。
朝倉さんはきょとん、としちゃってるけど、僕にとっては、これくらいしか、今の朝倉さんにできることがないように思えたから。

「朝倉さんは僕と“ともだち”になってくれたのに、僕は、今みたいに朝倉さんが困ってるときに何もできなくて、見てることしかできなくて・・・だから、ごめんなさい」

そうやって、今度は深く頭を下げる。
にじんできた涙を、見せたく 見られたく、なかったから。

